

みなしご猫ちゃん

一年 山田來旺

昨年の夏休み、母の会社に遊びにいくと、アスファルトに小さな子猫がピーピー鳴いて、横たわっていた。まだ、へそのおもついで目も開いていない。炎天下の中このまま放っておけば死んでしまう。そんな状況なのに母は、

「どうしてあげる事もできないね。」

と悲しそうに言った。なんてひどい鬼なんだと僕は腹が立ったが、無責任に助ける事がどんなに大変なことになるか母と話をする内にやっと理解ができた。そもそも会社の近くには、野良猫にえさを与える人がいて、毎年しき地内に子猫を産むので、困り果てていた。母はありとあらゆる人に電話をかけて助けてくれる人を探した。けどやはり無責任に引き受けてくれる人はいるはずもなく困っていた所、お世話になってる動物病院の方が引き取ってくれると連絡があった。その時やっと子猫に触れ、タオルを引いた段ボールに入れてあげる事ができた。片手にすっぽりおさまるくらい小さな子猫を、つぶしてしまいそうで僕は触ることができなかった。

急いで母と動物病院に向かった。車の中では怖がらないように僕がしっかりと段ボールを抱え、時々

中を覗いた。

「頑張って生きるんだよ。もうすぐ着くからね。」

病院に着くと慣れた手つきでひよいと抱きかかえ、わざと鳴かせ、軽く診察して、

「元気だね。大丈夫そうだね。助けてくれてありがとね。」

と先生が言った。僕はほっとして肩の力が一気に抜けた。

それからは看護師さんが交代で家に連れて帰り毎日二・三時間おきに哺乳瓶でミルクを上げてくれると聞いた。その時僕は同じことができただろうかと考えたけど申し訳ない気持ちでいっぱいになった。これをきっかけに母の会社の周りに貼り紙をした。

『野良猫に餌をあげないでください。』

それから子猫を産みに来る猫は少なくなった。毎年かわいい猫を見られなくなるのはさみしいけどこれでよかったです。

あの時のみなしご猫ちゃんは看護師さんの家でかわいがってもらい、一年後、お母さんになって立派に子育てをしているそうです。